
壊れたもの

岸川 澪

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れたもの

【Nコード】

N1595Z

【作者名】

岸川 澪

【あらすじ】

「そう、最初から必要なかったのよ・・・

宮野志保の頭脳なんて・・・」

「わるい人間を罰して何がいけないの？

うふふふっ・・・

この女はたくさんの人間を殺したの！生きてない方がいいのよ！」

「愛してるよ・・・哀」

「消えちまえっ・・・！」

あの奇妙な出来事から一年・・・

半年前・・・つまり出来事の半年後、組織の陣地を見つけ、乗り込んだ。

ただし、幹部のジンの手によりすべてを闇に葬られた・・・

それも、すべてのコンピューターを爆破するという残忍な方法で・・・
奇跡的に助かった二人

「僕たちは、犯罪者と友達になった覚えなんてありません！」

「そうだよっ！私たち少年探偵団だもん！犯罪者と友達になんかなれない！」

周りにいたすべての人間が避けるようになった・・・

そう、「犯罪者」という肩書きのせいで。

世界規模で放送された事実はいびきものだった

20年前、天才とはこの人間だと言われていた、宮野厚司

その人物がある恐ろしい組織にいた事が発覚

しかもその娘、宮野志保が研究を受け継ぎ、恐ろしき薬を開発して
しまったという事も・・・

その宮野志保は今灰原哀という名前で姿かたちを変え、この世での
うのうと暮らしていると報道された

みな哀から避け始めた

みな逃げていく・・・

でも・・・その中で助けてくれたのは・・・？

「ごめんなさいっ・・・ごめんなさい!」

「もういいよ・・・」

「はあっ・・・はあ・・・」

「もう、終わったんだ

すべて・・・」

「うっ・・・うっ・・・うあああああ!」

そう・・・すべてが終わったんだよ・・・

「これで俺の人生も、組織もおわる・・・」

「ジンはどうしてこの組織に・・・?」

「俺は両親の顔も知らない

生まれてすぐ道端に捨てられた

相当の田舎で、吹雪の日だったから、凍え死にかけてたところを、

あの方に拾われた

結構可愛がってもらったよ、それも普通のガキ以上に

その代償としてこの組織で、人殺し（殺人者）として生きろといわ

れた

なんでもしたよ・・・あの方のためなら・・・

何の記憶も無い俺の頭の隅にあるのは、寒く冷たい雪に包まれた事
その中から伸びてきた手は確かに暖かく、俺を心配そうな目（瞳）
で包んだ

死んでもこの人の言う事を聞かなければいけないと信じた

そして今ここにいる

もしあの方があの時通らなかつたら、俺は今ここに存在しないんだ
俺が死んでもあの方は守る」

「じ・・・ん・・・」

「だがそれも終わりだ・・・

あの方がお望みになったこの組織ももう修復不可
もう、終わりだ」

「それはっ・・・」

「シェリー、お前に関するデータが大量に入ったメールが、送られ
るんだよ

警視庁にこのボタンを押すとな」

「あなたがそれを押したところで私が逮捕されるだけ
その前にあなたは確実に死ぬわ」

「しかも高性能付き那門でこのボタンを押すとこの組織の建物にあ
るすべてのコンピューターのデータが吹っ飛ぶんだ
空気中に」

「そんな事したら一体どうなることかつ・・・

このボタンをおし、あのデータが吹っ飛んだら・・・すべてが闇に葬
られてしまうわ・・・」

「そうだ・・・」

あの方の遺言でいくと、もし自分の死後、組織が安全に保たれないのであれば、すべてのデータを消し、自分のすべての希望を捨てて欲しいという事だ」

「だめよっ・・・ジン！」

「あばよ、シェリー」

「でも・・・もう何も・・・何も戻せない・・・」

「戻さなくていい・・・戦うんだよ・・・」

「学校は、休もう・・・」

「・・・ええ・・・」

ピンポン

インターホンのベルが鳴り、出てみると、そこにいたのは警部、佐藤刑事、高木刑事だった

「え・・・」

「今日は君たちに話がある
入ってもいいかね？」

「ここは博士の家だからわかんないなあ」と言いたいところだったのに、入ってこられた

「哀、逃げろっ・・・」

「え・・・」

「動かないでもらえるかな？」

「はい」

「哀っ！」

「いいの」

「今日は・・・2ヶ月前警視庁の本部のメールにきたメールの話だ

中には、二ヶ月ほど前に起きた、『黒の組織大爆破事件』の裏世界のある人物についてだった

その中でその人物の名前は、『シェリー』と書かれている。

どうやらその人物の本名は、宮野志保という女性らしい

今は18歳だそうだ。

だがな、その女性の顔写真はそのなかにあっただが、君にとっても似ていたんだよ・・・哀君」

「っ・・・」

・
そういった警部の合図で、高木刑事がクリックをして見せてくれた・

その女性の顔立ちは、哀と瓜二つ

簡単に言えばこの画像は彼女の将来とでも言えるのだろうか

美人な顔立ちだが、タートルの上に白衣すがた

何かの証明写真のようなものだった

「そしてこの文章の中にはかかれていた

20年前天才と言われていた科学者、博士号も手に入れている宮野厚司の娘、宮野志保は、ここ数ヶ月の間に、彼女自身が開発したAPT-X4869という薬品を飲み、体が幼児化して、組織から脱出誰かに匿われ、どうやら灰原哀という名前で小学一年生をすごしている・・・

このことに関して、これ以上のことは書かれていなかったが、君の事で間違いないだろう

灰原なんて苗字、君以外ないからな・・・」

「っ・・・」

そう・・・です・・・」

「哀、だめだっ・・・」

「宮野志保は私です

宮野厚司は私の父です

APT-Xを飲んで幼児化して、ここに匿ってもらってます!」

「だとしたら、君は逮捕される事になるんだ」

「わかってます!!」

「哀っ！」

ちがう・・・哀は殺されると脅されてやつただけだ・・・」

「ただし、このことをあの事件に関与していたFBIに伝えようと、彼女の事は逮捕も起訴もさせないといっていた

FBIがそういつているため、われわれは君に手を出さない

灰原哀さんにはな

宮野志保さんは、どうなるかわからない・・・

コナン君のことも調べさせてもらった

説明は面倒なんで、やめとくが」

「はい・・・」

「ただし、問題は・・・」

「・・・?」

「組織の誰かが警視庁にメールを送ったのと同時に、マスコミにも売られていたようで・・・」

「そんな・・・」

翌朝

「20年前天才と言われた宮野厚司の娘、宮野志保が2ヶ月前に起きた爆破事件の組織に関与していた事が発覚しました

彼女は数ヶ月ずっと行方をくらましているそうです

という事で、宮野志保さんは、昨夜、国際指名手配されました
宮野志保さんの顔写真がこちらです」

「嘘ッ・・・」

「警部・・・どうしてこんな事に・・・」

顔写真なんかを報道されたら、ばれてしまう

宮野志保Ⅱ 灰原哀と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1595z/>

壊れたもの

2011年12月5日20時10分発行